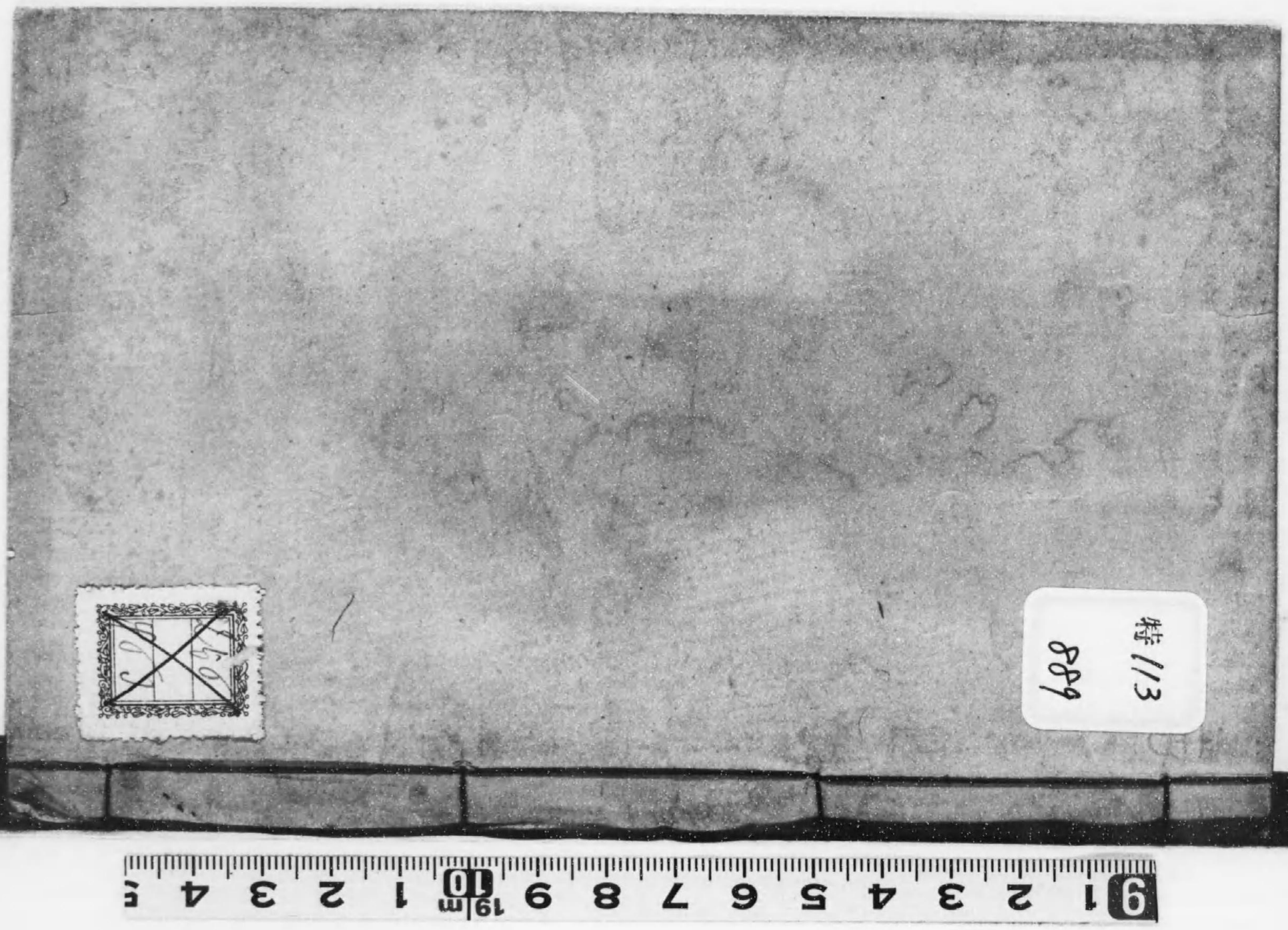


部

特113
889

楊貴妃

内之部巻之八ノ三

視別	シテ　楊貴妃
装	(面)増、又小面にも　襟　鬘　同帯　天冠　着附箔　緋大口　唐織壺折　腰帯　扇
東	ワキ　方士
附	襟　着附厚板　白大口　法被(側次にも)　扇
所	仙界(蓬萊宮中)
季	三月
類別	番目

大正八
5. 4. 7
内文

解説

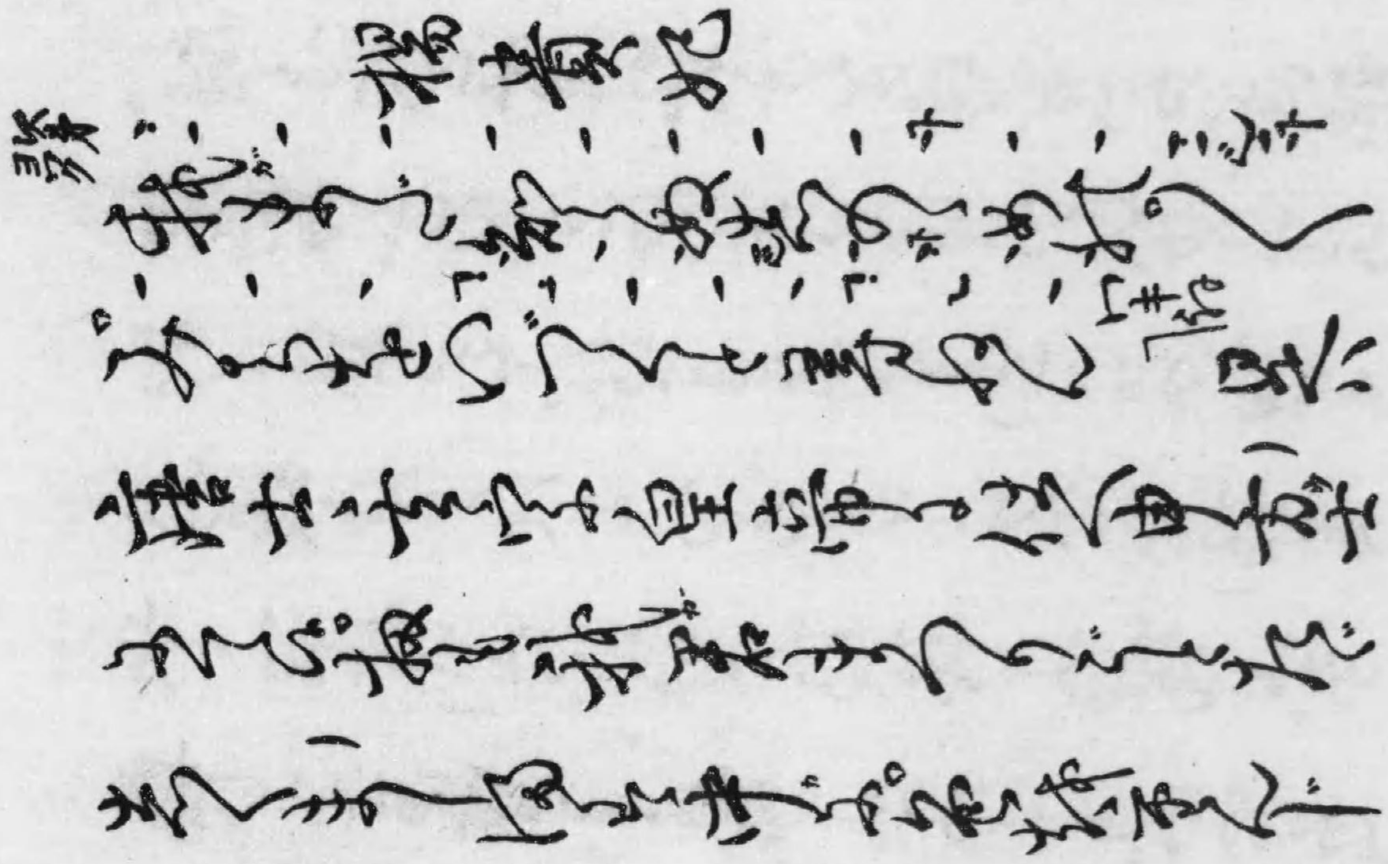
始め囃方坐着き、作物引廻しかけ、シテ中に入り、大小前へ出す、シテは作物中にて床几にかゝる。
夫よりワキ、次第にて出で、舞臺に入り大小の方へ向き謡ふ。

ワキ次第 『我まだ知らぬしの、めの』　此處は納めて謡ふべし。名宣、道行同斷。着ゼリフ濟みて
シ三枚裏 『昔は驪山の春の園に』　とシテ作物の中にて謡ひ出す、此謡位あり。
シ四枚裏 『九華の帳をおしのけて』　此處にて引廻し下す。
初五枚表同 『梨花一枝雨を帶たるよそほひの』　初同は納めてつけ謡ふ。
ワ五枚裏 『いかに申上候』　此詞はシテへかゝり謡ふ。
シ七枚裏 『是こそ有し筐よとて』　此處にてシテ、天冠左に持ち、ワキへ渡す。天冠は前に後見より
受取り持ち居るなり。
シ九枚裏 『其のかざしにて舞しとて』　此處にてワキより天冠受取り、作物を出づ。
同次第 『そゞろに濡るゝ袂かな』　此地次第にてくつろぎ、物着、天冠着て常坐に出で、
シ同 『何事も夢幻の戯れや』　とハツキリ謡ふ。
地同 『あはれ胡蝶の舞ならん』　の後、イロエ、
シ同 『それ過去遠々の昔を思へば』　此處ハツキリ謡ふべし。

クセ

クセはシテに種々形あり、見計ひ謡ふべし。

十二枚裏地 『うゐの曲』　の後、序ノ舞。
シ同テワキ 『羽衣の曲』　此處ハツキリ謡ふべし。
シ同ワ 『戀しき昔の物語』　此處にて天冠脱ぎ左へ持ち、ワキへ渡し、ワキと入り替ると、ワキは橋懸
へ行き、シテは中にてワキを見送る。以下種々形あり、見計ひ謡ふべし。



艶なる事なり給へる容色
世に双なき美人なれば楊家
乃娘なりしかくこそ名を楊貴
妃とぞ名をば付けられける細身
にて馬嵬にて果てし申ての
ちに帝歌うをば聞くぞ魂

魂のありかを尋ねあまたの
宣旨を伯をば碧霞の下黄泉
までぐ事をば更に魂魄乃
ありかを知らんとて未遂業
宮に至りて程なく遂業未
[illegible]

こそかれ傳にきくも玉のおか
うはそらとも浪路をわけて
行ゑはほのみえし嶋山の
草乃うかねの枕ゆめか世々
國に着にけり〳〵程に
蓬莱宮にやすらひ所をたつぬれば

尋りやよ太眞院有し教へにまかせ
うつゝ蓬莱宮にきて見れば
宮殿ばん〳〵としてまる邊際
もなく莊嚴ぞゝとしてさかれ
から七寶をちりばめたる漢宮
萬里のよそほひ長生驪山の

かね探もぞみえて更にあらざりしに
かしこぞ蓬莱といへる所やおはす又
数くの宮中を見れば太真
殿と額のうたれたる宮あり
此所に翡翠しばれ申さん
うかゞはゞやと存じ候
昔は驪山の
春の園にともに詠めし花の色
うつればかはるならひとて今は
蓬莱の秋の洞に獨りながむる
月影もぬるゝ顔なる袂かな
恋しのいにしへやな　つゝきの
いかに案内申せば唐の天子の勅使

便宜さそ也とまりてつぼ八内
ふなまくの「女」何唐帝れ仕とハ何
しふ宮ふ寄れる九ゆ年れ帳を
御のまてぶれ屋を日ぎつ「年」立
出れふ法法めとこれば「テ」雲れ雲
ばら「キ」花乃かふ花を「セキ」家ちち

涙眼のちちるぱ涙を浮べさせ
前
ば　梨花つ枝
ちしの乃ぶ〳〵ヤアス人懸の美美れ
ある末央の枝乃みどりもちれ
みそいく揺べ梨ぱつる平ぶ宮
打移代の頼色れなるも涯

一ここ ここ
やく
ワキ詞「めづらかなや上はおもはく宮
世にまし有し時だに行ひし事ハ
おこなひ給ひぬべきやうにもあら
きかせて彼唯一のすゝめは歎き
まづ今ハ我があやしみをもさせ
給はゞ我宣旨を仰ぎはたさせ

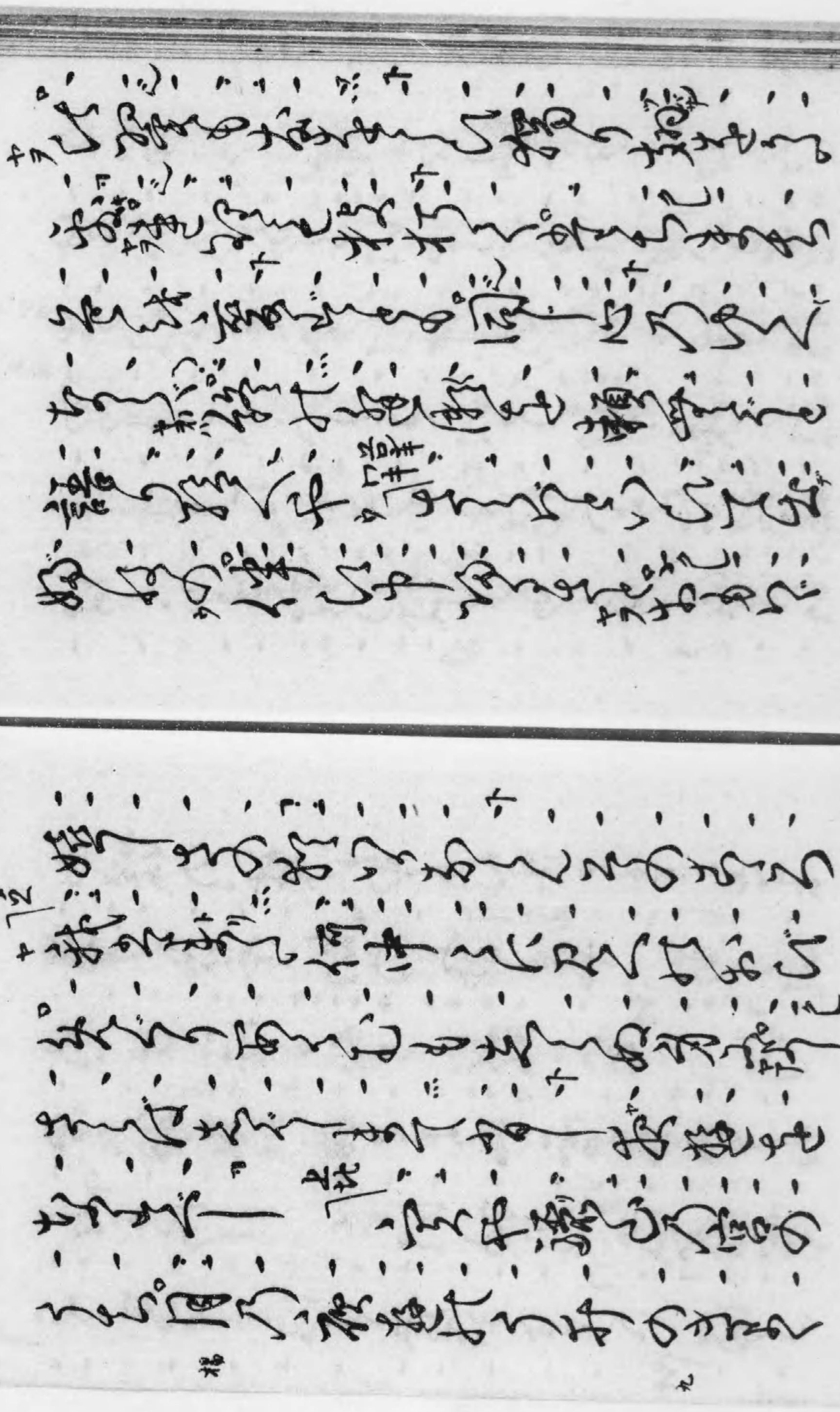
近寄しまいらせあまた有事
中 ここ
唯其君の情心ざし深うぞ思ひ
ここ
猶も思へバ唯よし涙の末こそ
ここ 女詞
はく「さらば沙汰中とく今ハかくれ
あやなき身の露のかたみにもあかぬ玉
乃かんざしが様な事なりけるば

情をそ御ふれ（中）ぞつてはてきの
まけう草のかきぐ（下）なるバ中く
に便の風ハ根めやゝ今はられ
恋草のあぶ四里をとゝ
きびきを所（つきかんか）ねしもかるべき事
まゝねバ忍歸りて案ゆきんゝ去

あゝ時笠の物をきびく（高）いと
ゝかりかゝみてぶれうむば
ゝ出（カル）ぐ方さるゝ人さむきれず
（隔）いやとゝそハ安ゆ顔ゝかるべき
物をきバゝぐゝの信じ給ゝ
ぞ身とをゝ人をきびゝ

ことばあらばそれをしるしに申
すべし　女詞　げにげにそれも理なり　思
ひ出る我ことの葉　昔秋の七日の
私語ごと星にちかひし言の葉
も　天にあらば願はくは比翼
の鳥とならん　地にあらばねが

はくハ連理の枝とならんと誓ひし
事をひそかに伝へよや　私語
なれども今もれそむる涙の袖
されども世の中の流転
生死の習ひとて　その身は馬嵬
にとゞまり　魂の仙宮にいたりつゝ



女「さかざしにて華しさく　地「ゆるゝ
風のそよ　女「さしも袖乃うつろふ雪
霓裳羽衣れし曲をよや霓裳羽衣の
乃舞を續ぬる旅の窓　女上「何
事も夢幻の夢ぞや　地「あはれ
小蝶の華あらん　「クリ女
詞上「入まゐる寺

「クリ
夫逢ふ者を思へバいつも別ます
乃姫と生れ來ぬる水の流
桃の更に生れの縁もなし
「ヒテサシ
終に二十五菩薩ともに何まつ
生者必滅の理りにまかせん
天人乃五衰より須弥の四方なれ

揚

[illegible]千年孫子相ぬ
[illegible]
いたんや若かりしころ欲
[illegible]中乃おぎをみと田やうハ相も
そのうみハ上男乃法仙たるが
[illegible]昔れもかに有るかりる人男
[illegible]
みまれまして相撲家の保言る娘

[illegible]れいまぐ知る人ありしふ若
[illegible]
[illegible]ぶ石出
[illegible]宮を定めて直ちに備前国
宮の四ちれも孫つきぬまバ
[illegible]ぶ[illegible]の鳴る[illegible]相
[illegible]まりて[illegible]水乃あれ

かの驪山宮乃ちかひさへ
遅乃静かに待ちわびて
きぬぎぬも今日は出でば眠ける甚
文月七日乃夜半のさゝめこと
むつごとの比翼連理のことはりも
よしなくくるしさめぐりめぐりの縁

乃ちぎりよれ想ひのたねならば
なかなかにまよひて我身
あはれ我は生けるはかなさ
乃ちりしを見るも人の命こそ
てゆくよしもなきこそ道遠え
ぬ会者定離ぞと其の時は逢ひて

揚

著作權所有

大正五年四月四日印刷
大正五年四月九日發行

東京市深川區西平野町一番地
著作者　寶生九郎

東京市日本橋區通四丁目八番地
發行者　江島伊兵衛

東京市日本橋區通四丁目八番地
發行所　椀屋謠曲書肆

東京市神田區皆川町二番地
印刷者　田村茂太郎

終